

**演題：**混合研究法に関する説明力と適応力の認識と学修ニーズ

**著者：**河村 洋子<sup>1)</sup>、抱井 尚子<sup>2)</sup>

**所属：**1)産業医科大学 2)青山学院大学

**本発表の専門分野：**研究方法学修、看護教育

**【背景】**現在日本混合研究法学会の理事を中心とした研究プロジェクトチーム（以下、研究班）では、看護分野における混合研究法の学修ニーズに応えるための混合研究法 e-ラーニングの開発を目指し取り組んでいる。その一環として昨年は八田ら（2021）が混合研究法の学習や実践の経験の違いによって学び進めることの障壁の認識や学習ニーズが異なることを明らかにした。本研究は、混合研究法の実践に関する説明力や適応力の自己評価（認識）の観点から検証し、学習ニーズに関して多角的な知見を得ることを目的とした。また、研究班は看護分野の研究者の混合研究法に関する多様な現状とニーズを捉える基礎的な調査として、オンラインアンケート調査とフォーカス・グループ・インタビューを実施しており、本研究においても量的・質的双方のデータを分析し結果を統合することで、学習ニーズについて多面的に検証することを試みた。

**【方法】**看護分野の研究者を対象に実施したオンラインアンケートのデータ（八田ら, 2021）から混合研究法に関する力を測ることを目的として開発された Guttermann 尺度 (Guterman, 2017) のうち、混合研究法に関して説明する力と適用する力を、リサーチクエスチョン・哲学（3 項目）、デザイン／アプローチ（10 項目）、サンプリング（2 項目）、データ収集（2 項目）、結果の公表（2 項目）の観点から自己評価する質問項目を用いて、説明力と適用力の合計点を算出した。この合計点について、相互に独立するように、高、中、低の 3 群に分けた。この 3 群間について、研究アプローチの傾向、混合研究法のスキルに対する満足感、Guterman 尺度の中の混合研究法に関する学習や経験の違いを検証した。また、アンケート回答者の中に含まれる FGI 参加者 23 名の逐語録を用いて学習ニーズについて分析し 3 群間による違いを検証し、量的データの結果と統合する予定である。

**【結果・考察・結論】**量的データの分析には該当する 19 項目に回答した 114 名のデータを用いた。説明力と適応力の自己評価は強く関連していることが確認できた（相関係数 = 0.952,  $p < .001$ ）。説明力の平均値は 25 点満点中、高群では 18.9 ( $SD = 2.27$ ,  $n = 34$ )、中群では 11.8 ( $SD = 1.6$ ,  $n = 30$ )、低群は 6.7 ( $SD = 1.0$ ,  $n = 50$ ) であった。適用力は高群 15.6 ( $SD = 2.1$ ,  $n = 34$ )、中群 9.7 ( $SD = 1.2$ ,  $n = 27$ )、低群 5.7 ( $SD = 0.9$ ,  $n = 53$ ) であった。また、説明力と適用力双方の 3 群間で、混合研究法のトレーニングを受けた経験有無の分布に有意な差が確認できた ( $p < 0.05$ )。今後さらに量的データの分析を進め、質的データの分析を行い、統合し混合型研究による知見の創出を目指す。

**【混合研究法への示唆】**本研究は看護研究者のための混合研究法 e-ラーニング開発を目的とする多段階混合研究法プロジェクトの一部にあたる。本研究は混合研究法の学修をテーマとして、それ自体が収斂デザインによる混合型研究として学修材料になり得るため、本邦の混合研究法の広がりに貢献することができると言える。

#### 【参考文献】

- Guetterman, T. C., et al. (2017). Development of a Self-Rated Mixed Methods Skills Assessment: The National Institutes of Health Mixed Methods Research Training Program for the Health Sciences. *J Contin Educ Health Prof*, 37(2), 76-82.
- 八田太一・阿部路子・田島千裕・抱井尚子. (2021). 混合研究法における「統合」の実現形態—MMR 教育ニーズの含意 第 7 回混合研究法学会年次大会プログラム・抄録集, 64.

**演題**：看護研究における混合研究法の学習と実践のハードル—GTxAによるデルファイ調査の逐語録分析から—

**著者**：稻葉 光行<sup>1)</sup>、高木 亜希子<sup>2)</sup>、抱井 尚子<sup>2)</sup>

**所属**：1)立命館大学 2)青山学院大学

**本発表の専門分野**：混合研究法、看護研究、テキストマイニング、GTxA

**【背景】**質的・量的研究のハイブリッドである混合研究法の学習や研究実践では、それぞれの研究法を単独で学習・実践するよりも様々な課題が起こると推測される。筆者らはこれまで、看護学研究者を対象とし、混合研究法に関わるハードルの調査に取り組んできた。そしてその一環として、海外のエキスパートに対してデルファイ調査を実施した。本発表では、その逐語録を分析した結果を報告する。

**【方法】**本研究では、混合研究法のエキスパートである海外の研究者5名に対するデルファイ調査を実施した。そしてそこで得られた語りを、混合型分析 (mixed analysis) の1つとして筆者らが提案する Grounded Text Mining Approach (GTxA) (Inaba & Kakai, 2019) を用いて分析した。GTxAは、構成主義版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (C-CTA) によるデータ分析とテキストマイニングを反復的に適用し、得られた知見を統合したメタ推論を得ることを目指す混合研究法である。

本研究では、C-GTAを用いて、まず分析者が単語毎・文章毎・焦点化コーディングを行った。その後テキストマイニングによる分析を行い、C-GTA段階も含めた反復的な検証を行った。さらに両方の結果に対するメタ推論を導出した。

**【結果・考察・結論】**分析の結果、混合研究法の学習・実践に関わってエキスパートが重視する視点として、"paradigm"などに象徴される「概念理解」、"literature"に象徴される「文献による学び」、"publish" や "joint display" に象徴される「研究成果発信」、そして"training" に象徴される「実践的トレーニング」といった概念が見出された。また「概念理解」および「研究成果発信」をほとんどのエキスパートが重視する一方、「文献による学び」と「実践的トレーニング」は重視の程度に差があることが示された。

**【混合研究法への示唆】**混合研究法に対する示唆は2点である。1点は、GTxAを用いることで、エキスパートが重視する概念を質的・量的データを並置する形で視覚的に提示できることである。もう一点は、テキストマイニングによって質的データ分析の過程が効率化されたことである。近年自然言語処理技術によって質的データ分析を効率化する試みが行われているが (Poth et al., 2021)、本研究も同様の効率化に貢献できる可能性がある。

### 【参考文献】

- Inaba, M., & Kakai, H. (2019). Grounded Text Mining Approach: A Synergy between Grounded Theory and Text Mining. In A. Bryant & K. Charmaz (Eds.), *The SAGE Handbook of Current Developments in Grounded Theory* (pp. 332–351). SAGE Publications Ltd.
- Poth, C. N., Bulut, O., Aquilina, A. M., & Otto, S. J. G. (2021). Using Data Mining for Rapid Complex Case Study Descriptions: Example of Public Health Briefings During the Onset of the COVID-19 Pandemic. *Journal of Mixed Methods Research*, 15(3), 348–373. <https://doi.org/10.1177/15586898211013925>

**演題：**質的研究主導型マルチメソッド・混合研究法（MMMR）を用いた教材開発研究

**著者：**抱井 尚子

**所属：**青山学院大学

**本発表の専門分野：**研究法、看護学研究

**【背景】**本研究は、日本の看護研究者に対する混合研究法教育のガイドラインと e-ラーニングシステムの開発を目的とし、2020 年度より始まった多段階調査である。今回の調査では、日本の看護学研究者が混合研究法に関わって遭遇するハードルを特定し、それらの克服を支援する教育のあり方を、海外のエキスパートに対するデルファイ調査によって明らかにすることを目指した。当初本調査では、専門家への匿名の量的アンケート調査を実施し、合意に近づくまで調査をくり返す伝統的なデルファイ調査を、自由記述欄を設けた上で実施する計画していた。しかし問題の複雑さから、濃密なデータ収集が必要と判断し、デルファイ調査の第 1 ラウンドを、海外のエキスパート 5 名に対する個別インタビューに変更した。そしてこのインタビュー調査の結果を元に質問項目を作成した。第 2 ラウンドのデルファイ調査では、世界の様々な地域で混合研究法の教育・研究に携わる看護学研究者を対象に、オンラインサーベイを実施した。

#### 【混合研究法に関する概念・理論の提示】

一般に、複数の段階を通してデータ収集を実施する多段階混合研究法デザインは、コアデザインを組み合わせた「コンプレックスデザイン」(Creswell & Plano Clark, 2018)の一つとされる。一方、本研究で採用した複合的デザインは、同じパラダイムに属する調査法を組み合わせた「マルチメソッド」と、異なるパラダイムの調査法を組み合わせた混合研究法の両方の要素を併せ持った「マルチメソッド・混合研究法」(multimethod mixed methods: MMMR) (Hesse-Biber et al., 2015)であるといえる。

#### 【混合研究法への示唆】

本研究は、教材開発を目的とする「多段階混合研究法」の枠組みを用いており、探索的な研究や理論生成に対してよりオープンな「質的研究主導型」のアプローチを探っている (Hesse-Biber et al., 2015)。さらに本研究は、日本の看護学研究者から収集したインタビューデータをもとに、次の段階であるデルファイ調査の第 1 ラウンド用に、混合研究法のエキスパートを対象としたインタビューガイドを作成している。このことから本研究は、"QUAL→QUAL"への「積み上げ」の要素を含むデザインとなっている。このため本研究は、「質的研究主導型マルチメソッド混合研究法(MMMR)アプローチ」 (Hesse-Biber et al., 2015)の一事例であるとも言える。

#### 【参考文献】

- Creswell, J.W., & Plano Clark, V.L. (2018). *Designing and conducting mixed methods research (3rd ed.)*. Sage.
- Hesse-Biber, S. N., Rodriguez, D., & Frost, N. A. (2015). A qualitatively driven approach to multimethod and mixed methods research. In S. N. Hesse-Biber & R. B. Johnson (Eds.), *The Oxford Handbook of Multimethod and Mixed Methods Research Inquiry* (pp. 3-20). Oxford University Press.

**演題**：看護研究者のための MMR 教育モデルの構築－混合型デルファイ調査法を用いて－

**著者**：抱井 尚子<sup>1)</sup>、高木 亜希子<sup>1)</sup>、阿部 路子<sup>1)</sup>、眞壁 幸子<sup>2)</sup>、大河原 知嘉子<sup>3)</sup>、成田 慶一<sup>4)</sup>、亀井 智子<sup>5)</sup>

**所属**：1)青山学院大学 2)秋田大学 3)東京医療保健大学 4)京都大学 5)聖路加国際大学

**本発表の専門分野**：研究法、看護研究

**【背景】**1950 年代に、特定の課題に対する専門家集団の見解を集約する目的で開発されたデルファイ法は、今日ではその価値が科学的にも実践的にも様々な分野において認められている(von der Gracht, 2012)。日本の看護研究においても、近年デルファイ法の使用が飛躍的に増加している（藤田他, 2017）。伝統的なデルファイ調査では、専門家に対する匿名の量的アンケート調査の実施およびその結果の提示が合意に近づくまで数回くり返される。一方、海外においては、アンケート調査法のみならず、インタビュー調査法も併用してデータ収集を行う混合型デルファイ調査(mixed methods Delphi study)の利用がこのところ散見されるようになった。本発表は、海外の専門家集団が有する混合研究法教授法に関する見解を集約する混合型デルファイ調査の中間報告である。デルファイ調査の結果をもとに、研究班は混合研究法教育モデルを構築し、これを e-ラーニングの開発に繋げる予定である。

**【方法】**混合型デルファイ調査の第 1 ラウンドとして、合目的的にサンプリングした専門家集団 5 名に対する個別インタビューを 2021 年 10 月～12 月に実施した。インタビューデータの分析結果にもとづき、第 2 ラウンド用の質問紙票（教授法に関する 43 項目、学修リソースに関する 4 項目、属性に関する 15 項目）を作成した。合目的的サンプリングにより抽出した、混合型研究をトップジャーナルに出版している海外の看護学研究者合計 65 名に調査協力を要請するメールを 2022 年 3 月～4 月に送信し、結果として 14 名より全項目への回答を得た（有効回答率 21.5%）。

**【結果・考察・結論】**オンラインサーベイを用いたデルファイ調査第 2 ラウンドで収集した混合研究法の教授法に関する 43 項目を記述統計により分析した。コンセンサスを合意率 51% 以上と定義し、学士号取得看護師、修士課程、および博士課程レベルの 3 レベル別に項目を絞り込んだところ、各レベルで異なる数の項目が残った（学士号取得看護師レベル 11 項目、修士課程レベル 24 項目、博士課程レベル 26 項目）。

**【混合研究法への示唆】**コンセンサスを得た項目数にみられるレベル別の差異は、どのような対象に対し、どのような点を重視して混合研究法の教育が実施されるべきかに関するエキスパートの見解を表すものである。その顕著な傾向として、混合研究法は飽くまで研究者を目指す者が学ぶべき調査方法であるという共通認識が存在することが明らかになった。今回の結果にもとづき、引き続きデルファイ調査の第 3 ラウンドを進めていく。

**【参考文献】**藤田優一・植木慎悟・北尾美香他 (2018) .看護師を対象とするデルファイ法を用いた国内文献の研究手順の実態 武庫川女子大学看護学ジャーナル, 3, 35-42.

von der Gracht, H.A. (2012). Consensus measurement in Delphi studies review and implications for future quality assurance. *Technological Forecasting & Social Change*, 79, 1525–1536.